

高校生と一緒に考える、食と農の未来 ―農林水産政策研究の現場から

農林水産政策研究所 次長 八百屋 市男

自席の正面には農林水産省の『ビジョン・ステートメント』が大きく貼ってあります。ここには『生命を支える「食」と安心して暮らせる「環境」を未来の子どもたちに継承していくことを使命として…』とあります。もちろん農林水産政策研究所は農林水産省の一施設等機関としてこの役割を担います。政策研究を通じて使命を果たしていくものではありますが、昨年、ある高校生たちとの交流を通じて未来の子どもたちへの継承について希望を感じられることができました。

その高校生たちは、東京都文京区にある東洋大学京北中学高等学校（以下「京北高校」）の皆さんです。京北高校は建学の精神「諸学の基礎は哲学にあり」に基づき、哲学的思考力と幅広い教養を重視した教育を行っており、一部の生徒たちは『2050年問題』について勉強しています。『2050年問題』とは、2050年までに直面する可能性のある社会問題の総称であり、国内では少子高齢化と人口減少に起因する、労働力不足、社会保障費の増大、地域社会の維持困難など様々な社会・経済的な課題、世界的にはコーヒーなど気候変動の影響を受けて栽培適地が減少する問題や食料・水不足のリスクなどが挙げられています。

昨年8月4日には教員・生徒など34名が農林水産省へ来訪され、リクエストのあった本省地下の食堂で昼食をとり、報道会見室などを見学した後、農林水産政策研究所に来ていただきました。当所からは、小泉上席主任研究官から「世界の食料問題」、私からは「日本の食料政策」について、それぞれ講義を行いました。その後質疑応答となったのですが、これがすごいものとなりました。元々の予定では15分から20分程度の質疑応答の時間をとっていましたが、質問の手が止まらず1時間半を超えるマラソンの議論となりました。質問内容も幅広く、「農業に革新的な技術が導入された場合の農水省の対応」「虫害対策」「品種改良による悪影響」「現場の課題と政策立案の差異とその調整方法」「若者が農業に関わるための制度や支援」「SDGs目標の将来の達成可能性と解決策」「スマート農業の研究・普及状況」「人口増加や異常気象による食料需給バランス予測」「有機農業と環境共生」「品種改良と食の

旬」「アフリカ産コーヒー生産者への自立支援」「日本からの飢餓対策支援」「3Dフードプリンターの活用可能性」「湯水対策」「米以外の輸出品目」「中国向け水産物輸出」「農地拡大など温暖化による影響」などなど。生徒たちは事前に勉強してきたと思われませんが、食料、農業、環境等の課題に関する興味の持ち方や何よりもその熱心さに感動しました。

この交流はその後も続き、11月8日に京北高校で行われたオランダプログラム報告会にお招きいただきました。彼らは9月の秋休みにオランダに行っており、現地のライデン大学でチームに分かれて2050年問題の英語でのプレゼンテーション、EU議事堂、ベルギー日本大使館へ訪問し外交官との意見交換、現地高校生との交流などを行っています。報告会では教員、保護者、他の生徒を前に『挑戦の6日間～なぜ我々はオランダへ？～』と題し、現地で行った英語のプレゼンテーションをそのまま披露してくれました。2050年問題のテーマとして、「AI」、「子供の労働問題」などと並んで「農業と教育」、「食料不足対策」といった我々と議論した内容もふんだんに盛り込まれていてこれまでの成果が見られうれしく思いました。発表後にも日本や世界に貢献していきたいといった発言が飛び出し、若者の今後の活躍に大いに期待したいところです。

今回このプログラムに参加している生徒たちは一般的な学生ですが、将来の課題を突き詰めていくと農業、食料問題が大きくクローズアップされたようで、我々の扱うテーマの意義と責任を改めて感じる事となりました。当所の研究は、農林水産政策の企画・立案に資する研究成果を出すとともに、研究機関として学術的な水準の維持・向上も求められます。教育機関との位置づけではありませんが、長期的視野を持ち、若い世代へつなげていく活動も考えていければと思っています。

